

## 世界哲学史など

ここにもおいてます <https://mizutatakanobu.com/2023IP.pdf>

今日は、私の Twitter でのつぶやきの抜粋を多く使用します。

2015/1/25

今日は中小企業診断士の研究会である思想・哲学研究会で、「効率的市場仮説という不毛な議論」という題目で話をします。可能なら、なぜ人類は市場が効率的であるかどうかと不毛な議論をすることになったのか、というところまで議論できたらと思っています。私は解を持ってないので意見をいただければと。

→ のちに本職でレポートにしました。 <https://www.sparx.co.jp/report/special/>

2020/12/22 市場は効率的なのか？ 検証できない仮説の検証に費やした 50 年

2021/8/16 続・市場は効率的なのか？ 実験市場や人工市場での検討

2016/12/18

今日はかなり久々に、2 年弱ぶりくらいに、中小企業診断士の集まりである思想・哲学研究会へ行った来た。普通に楽しかった。日曜日に家を空けるのはなかなか大変だけど、来年は何回か参加しよう。

私が最後に発表したのが 2015 年 1 月で最後の参加が 2016 年 12 月だったようだ。そこから今日まで 7 年くらい子育てなどで週末をあけるのが難しく不参加であったが、落ち着いてきたので、また時々参加しようかと思う。しかし、本職・学術研究もあり哲学書を本格的に読み込んで話すのは今後も難しそう。とはいえ、この 7 年間で振り返っても、広い意味での哲学書は読んでいて、twitter に感想を書いたりしていた。まずは、これらのうち、「世界哲学史」(全 9 巻)の twitter へ書いた感想を紹介する。時間が余れば(たぶん余ると思う)この 7 年間で読んだ本のうち、少しでもかすっているかもしれない本の表紙を列挙して、簡単に紹介したいと思う。

== 世界哲学史 ==

[https://www.chikumashobo.co.jp/special/world\\_philosophy/](https://www.chikumashobo.co.jp/special/world_philosophy/)



筑摩書房創業 80 周年記念出版

ちくま新書 新シリーズ、堂々完結

# 世界哲学史

知の根源はここにある——

EAA 東京大学東アジア藝文書院  
連続シンポジウム  
「世界哲学・世界哲学史を再考する」  
詳細はこちら

責任編集 /  
伊藤邦武・山内志朗・  
中島隆博・納富信留

本シリーズは、古代から現代までを8巻で俯瞰し、時代を特徴づける主題から諸伝統を同時代的に見ていきます。

世界で展開された哲学の伝統や活動を通時的に見る時、現在私たちがどこに立っているか、  
将来どうあるべきかのヒントが得られるはずです。

人類の知の営みを新たな視野から再構築すること、それが「世界哲学史」の試みです。

## 1巻 (古代I) 知恵から愛知へ

- 序 世界哲学史に向けて 納富信留
- 1 哲学の誕生をめぐって 納富信留
- 2 古代西アジアにおける世界と魂 柴田大輔
- 3 旧約聖書とユダヤ教における世界と魂 高井啓介
- 4 中国の諸子百家における世界と魂 中島隆博
- 5 古代インドにおける世界と魂 赤松明彦
- 6 古代ギリシアの詩から哲学へ 松浦和也
- 7 ソクラテスとギリシア文化 栗原裕次
- 8 プラトンとアリストテレス 稲村一隆
- 9 ヘレニズムの哲学 荻原理
- 10 ギリシアとインドの出会いと交流 金澤修

## 2巻 (古代II) 世界哲学の成立と展開

- 1 哲学の世界化と制度・伝統 納富信留
- 2 ローマに入った哲学 近藤智彦
- 3 キリスト教の成立 戸田聡
- 4 大乘仏教の成立 下田正弘
- 5 古典中国の成立 渡邊義浩
- 6 仏教と儒教の論争 中島隆博
- 7 ゴロアスター教とマニ教 青木健
- 8 プラトン主義の伝統 西村洋平
- 9 東方教父の伝統 土橋茂樹
- 10 ラテン教父とアウグスティヌス 出村和彦

### 3巻 (中世Ⅰ) 超越と普遍に向けて

- 1 普遍と超越への知 山内志明
- 2 東方神学の系譜 袴田玲
- 3 教父哲学と修道院 山崎裕子
- 4 存在の問題と中世論理学 永嶋哲也
- 5 自由学芸と文法学 関沢和泉
- 6 イスラームにおける正統と異端 菊地達也
- 7 ギリシア哲学の伝統と継承 周藤多紀
- 8 仏教・道教・儒教 志野好伸
- 9 インドの形而上学 片岡啓
- 10 日本密教の世界観 阿部龍一

### 4巻 (中世Ⅱ) 個人の覚醒

- 1 都市の発達と個人の覚醒 山内志明
- 2 トマス・アクィナスと托鉢修道会 山口雅広
- 3 西洋中世における存在と本質 本間裕之
- 4 アラビア哲学とイスラーム 小村優太
- 5 トマス情念論による伝統の理論化 松根伸治
- 6 西洋中世の認識論 藤本温
- 7 西洋中世哲学の総括としての唯名論 辻内宣博
- 8 朱子学 垣内景子
- 9 鎌倉時代の仏教 藁輪顕量
- 10 中世ユダヤ哲学 志田雅宏

### 5巻 (中世Ⅲ) バロックの哲学

- 1 西洋中世から近世へ 山内志明
- 2 西洋近世の神秘主義 渡辺優
- 3 西洋中世の経済と倫理 山内志明
- 4 近世スコラ哲学 アダム・タカハシ
- 5 イエズス会とキリシタン 新居洋子
- 6 西洋における神学と哲学 大西克智
- 7 ポスト・デカルトの科学論と方法論 池田真治
- 8 近代朝鮮思想と日本 小倉紀蔵
- 9 明時代の中国哲学 中島隆博
- 10 朱子学と反朱子学 藍弘岳

### 6巻 (近代Ⅰ) 啓蒙と人間感情論

- 1 啓蒙の光と影 伊藤邦武
- 2 道徳感情論 柘植尚則
- 3 社会契約というロジック 西村正秀
- 4 啓蒙から革命へ 王寺賢太
- 5 啓蒙と宗教 山口雅広
- 6 植民地独立思想 西川秀和
- 7 批判哲学の企て 長田蔵人
- 8 イスラームの啓蒙思想 岡崎弘樹
- 9 中国における感情の哲学 石井剛
- 10 江戸時代の「情」の思想 高山大毅

### 7巻 (近代Ⅱ) 自由と歴史的発展

- 1 理性と自由 伊藤邦武
- 2 ドイツの国家意識 中川明才
- 3 西洋批判の哲学 竹内綱史
- 4 マルクスの資本主義批判 佐々木隆治
- 5 進化論と功利主義の道徳論 神崎宣次
- 6 数学と論理学の革命 原田雅樹
- 7 「新世界」という自己意識 小川仁志
- 8 スピリチュアリズムの変遷 三宅岳史
- 9 近代インドの普遍思想 冨澤かな
- 10 「文明」と近代日本 荻部直

### 8巻 (現代) グローバル時代の知

- 1 分析哲学の興亡 一ノ瀬正樹
  - 2 ヨーロッパの自意識と不安 檜垣立哉
  - 3 ポストモダン、あるいはポスト構造主義の論理と倫理 千葉雅也
  - 4 フェミニズムの思想と「女」をめぐる政治 清水晶子
  - 5 哲学と批評 安藤礼
  - 6 現代イスラーム哲学 中田考
  - 7 中国の現代哲学 王前
  - 8 日本哲学の連続性 上原麻有子
  - 9 アジアの中の日本 朝倉友海
  - 10 現代のアフリカ哲学 河野哲也
- 終章 世哲学史の展望 伊藤邦武

I 世界哲学の過去・現在・未来

- 1 これからの哲学に向けて—『世界哲学史』全八巻を振り返る  
山内志朗×中島隆博×納富信留
- 2 辺境から見た世界哲学 山内志朗
- 3 世界哲学としての日本哲学 中島隆博
- 4 世界哲学のスタイルと実践 納富信留

II 世界哲学史のさらなる論点

- 1 デカルト『情念論』の射程 津崎良典
- 2 中国哲学情報のヨーロッパへの流入 井川義次
- 3 シモーヌ・ヴェイユと鈴木大拙 佐藤紀子
- 4 インドの論理学 志田泰盛
- 5 イスラームの言語哲学 野元晋
- 6 道元の哲学 頼住光子
- 7 ロシアの現代哲学 乗松亨平
- 8 イタリアの現代哲学 岡田温司
- 9 現代のユダヤ哲学 永井晋
- 10 ナチスの農業思想 藤原辰史
- 11 ポスト世俗化の哲学 伊達聖伸
- 12 モンゴルの仏教とシャーマニズム 島村一平
- 13 正義論の哲学 神島裕子

執筆者

青木 健 (静岡文化芸術大学教授)

赤松明彦 (京都大学教授)

小倉紀蔵 (京都大学教授)

菊部 直 (東京大学教授)

小池寿子 (國學院大学教授)

総勢

115

名の

叢智が集結

佐々木隆治 (立教大学准教授)

佐藤 優 (作家・元外務省主任分析官)

千葉雅也 (立命館大学准教授)

橋爪大三郎 (東京工業大学名誉教授)

檜垣立哉 (大阪大学教授)

ほか

2021/8/12

寝る前に本を読んでも(1)毎日読みたくなるくらいには興味がある(2)すらすら読めるが眠たくなるくらい難しく起伏がない(3)反省で緊張せぬよう仕事や育児などには関係ない：3つそろうのは難しい。

ということで私にとって、最高のシリーズだった。

2020/1/25

世界哲学史 全 8 巻か、、、興味深いが、8 巻もあるのかあ、、、：筑摩書房 新シリーズ、ついに始動 世界哲学史 執筆者総勢 101 名の叡智が集結

[https://www.chikumashobo.co.jp/special/world\\_philosophy/](https://www.chikumashobo.co.jp/special/world_philosophy/)

初めのところが試し読みできるようになった。これは深そう。：世界哲学への挑戦は、私たちを改めて「哲学とは何か」の問いに晒すことになる。

<https://www.webchikuma.jp/articles/-/1930>

2020/4/18

気になってた「世界哲学史 1」を恐る恐る読み始めたが意外に読みやすい。「哲学は西洋に偏っていて普遍性がないのでは？」で始まるけど「そもそも普遍性とは何か？」ってなり「『哲学には普遍性が必要』とする哲学には普遍性はないのでは？」と、なかなか本題が始まらない。

「学問としての哲学は、現在、ほとんどの人を寄せ付けないほど特殊で、難解な専門用語を駆使する学問と見なされている。だが、それは本来の哲学であるのか。あらためて、根源にもどって考えるべき時ではないか。」

「人類が言語を語り、思考するようになって以来、なんらかの哲学の営みは始まっていたはずである。」

「世界哲学とは、哲学において世界を問い、世界という視野から哲学そのものを問い直す試みなのである。そこでは、人類・地球といった大きな視野と時間の流れから、私たちの伝統と知の可能性を見ていくことになる。」

「西洋哲学者たちが本当に異文化を理解し、評価できていたのかは、二〇世紀の文化人類学やポストモダンがあらためて問うた問題であるが、彼らの限界は理念上だけでなく、実際の経験や知見の限界でもあった。」

2020/5/5

こちらの第 1 巻、思いの外早く読み終わった。「哲学」ではなく「哲学史」だから"比較的"読みやすい。これまで地域ごとに分かれていた哲学史の研究がようやく統合され始めた感が分かった。この統合を進めるには日本は優位性あるかもって感じた。第 2 巻も読んでみるか。

引用：「世界哲学」は、二〇一八年八月到北京で開催された世界哲学学会大に向けて、日本の哲学界が打ち出した理念である。一九〇〇年のパリ大会以来、世界の哲学者が集い議論する場となってきた世界哲学学会は、一二〇年ちかい歴史で、いまだ日本で開催されていない。

引用：「世界哲学」を推進するにあたり、日本が先導すべき具体的プロジェクトとして焦点を当てたのが、「世界哲学史」である。日本では各地域・文化の哲学史研究が充実しており、それらの専門家を糾合して全体像を作り上げることが、世界哲学の基盤となるのではないか。

2020/5/29

こちらの第 2 巻も思いの外早く読み終わった。キリスト教が広がり始めたころの話。このころは哲学と宗教は密接だった。ライバルの宗教との論戦は哲学そのものだった。ここからどのように中世につながっていくのか楽しみ。というわけで 3 巻も買っちゃったよ。

2020/7/1

こちら第3巻読了。中世っていうのは政治が宗教や哲学と結びついた時代、というよりも結びつけないと統治してられないという時代だったのだろう。純粋哲学は教養として、学問の入り口で別物として勉強する、という雰囲気だったみたい。4巻は13世紀。

2020/7/25

こちら第4巻読了。そうは言っても中世は聖書とアリストテレスという権威的な書物が足かせになって全く新しいものが出にくかったと思う。時代ごとに、権威をもつ理論や考え方を批判しづらくなり、それが足かせとなって発展が遅くなっている分野ってあると思う。

2020/8/14

こちら第5巻読了。近世の哲学。大航海時代や技術革新に伴い哲学も大変化。とはいえ現代からみると議論の仕方はまだ滑稽さも。でもね、扱っている議題は今風に言えば、「宇宙の始まり」と「意識とは何か」。今でも解かれてない難問。今も昔も難解だけど果敢に挑むのは哲学。

そういう意味では、現代の「宇宙の始まり」や「意識とは何か」の議論は、次の時代から見ると滑稽に感じられるのかもしれない。まあ、現代が終わり次の時代が来ること自体があんまり想像できないけど、、、。

2020/9/20

6巻7巻読了。近世・近代の哲学史。長かった中世からの脱却、現代への過渡期にも見える。そして、一歩先にでたヨーロッパに追いつこうとするその他の地域。そのため、その他地域がどうヨーロッパに追いつくかみたいな話が多かった。

その他地域はアリストテレスを知らないからかえって足かせなく、すばやく近代化できたみたいな話もあった。欧州中世を否定するのに必死で、それを知らない人にとってはかえって分かりにくい。なるほど、これまでのことを知らないほうがかえって新しいことを吸収できるというのはあるかもしれない。

科学と哲学が分離し始めた時代と言われるが、どちらかと言えば、科学的発見が哲学に修正を迫ったと言っていいだろう。ダーウィンなんかは典型。ダーウィンは科学的な発見を解釈する際、これまでの哲学に修正を迫る必要が生じた。本人が希望したかどうかは分からないが、哲学論争に巻き込まれた感もある

いずれにせよ、何かの必要があって哲学を勉強するときは、哲学の歴史を知っておこうという感じの場合を除けば、現代からのほうがよいと思った。例えば、科学哲学ならポパーやクーン以降、政治哲学ならロールズ以降でいいと思う。最後の第8巻は現代哲学史。楽しみ。

2020/10/20

ようやく全巻読破。第8巻は現代哲学史で、哲学ど真ん中の認識論や存在論を中心に紹介されていて、全く意味不明。歴史の紹介なのに。現代哲学は自分が専門だったり興味ある分野（私の場合モデルの哲学や政治哲学など）以外、無理。

ただ、アフリカの哲学者がヨーロッパ近代哲学を徹底的に批判しているという話は興味深かった。植民地主義を止められなかった哲学をアフリカの人が批判するのは当然だよな。日本にもそういう考え方、もっとあっていいと思う（帝国主義をまねてしまったという意味で）。

そういう意味では近代以前の哲学は、もう間違ってしまったという前提で、歴史的な経緯をしる感じで読むって感じしかないかな。あんまり、正しいものとして受け止めるべきでないというか。

とはいえ、現代のど真ん中哲学は意味わかんないんで、まあ、専門分野、興味のある分野をさらに深めるために、たまたまその分野の哲学が必要になったらやる、たまたま哲学的な論争に巻き込まれたら応じる（ダーウィンみたいな）、みたいなしかないかな。

ちなみに、全8巻読み終わったと、好評につきもう一巻、別巻が1つ12月に出るらしい。まだ終われない。

参考：現代思想

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E6%80%9D%E6%83%B3>

2021/1/31

世界哲学史別巻、読了。シリーズ最終 8 巻が昨年 8 月にでたばかりだが、早くも同月に編者が山の上ホテルという渋い場所に集まり、シリーズ総括、反省を収録した前半と、それを受けて追記された短編章たちの後半で 12 月発売というスピード。世界哲学史は現在進行形で作られている

ロシア、イタリア、モンゴルなどの現代哲学という、日ごろあまり触れないものも載っていてかなり勉強になった。一方、ナチスの農業大臣が唱えた思想がひどすぎでびっくりした。ナチス内部からも批判があったというおぞましいもの。これがまだ 100 年もたっていないと考えると身の毛もよだつ。

ちなみに山の上ホテルのページ、渋すぎる。いつかはここで小規模研究会とかやってみたい。「東京の真ん中。文豪たちに愛されるホテル。川端康成さん、三島由紀夫さん、池波正太郎さんをはじめ数多くの作家の方々に愛され、定宿としてご利用いただいた山の上ホテル。」

<https://www.yamanoue-hotel.co.jp/concept/>

\*その後セミナーが開かれる

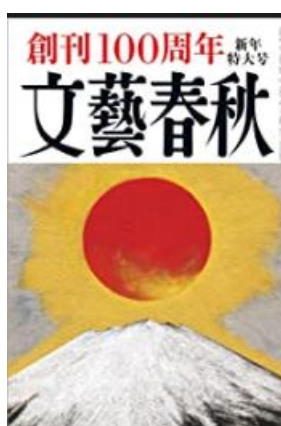
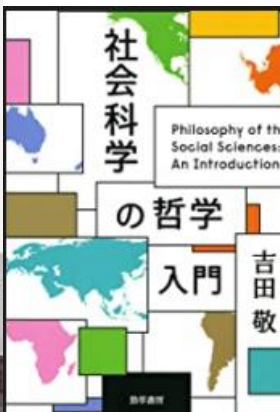
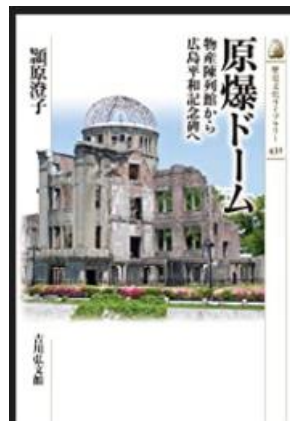
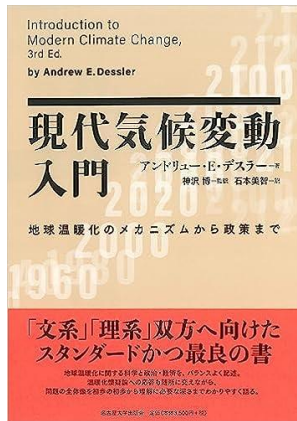
<https://www.eaa.c.u->

[tokyo.ac.jp/?s=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%93%B2%E5%AD%A6%E5%8F%B2%E3%82%92%E5%86%8D%E8%80%83%E3%81%99%E3%82%8B](https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/?s=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%93%B2%E5%AD%A6%E5%8F%B2%E3%82%92%E5%86%8D%E8%80%83%E3%81%99%E3%82%8B)

(終わり、以下参考)



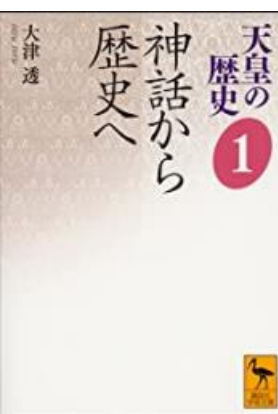
== この7年間で読んだ本のうち哲学に少しでもかすりそうな本の表紙(順番はバラバラ) ==



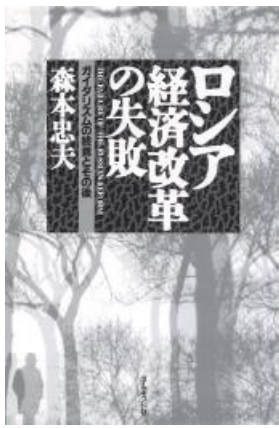
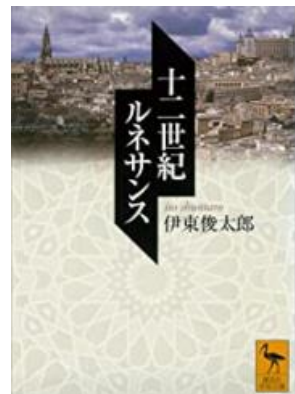










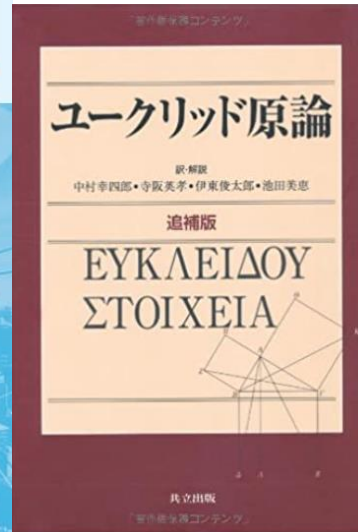
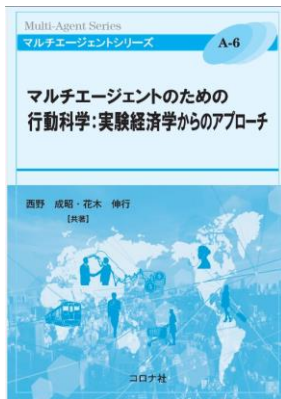
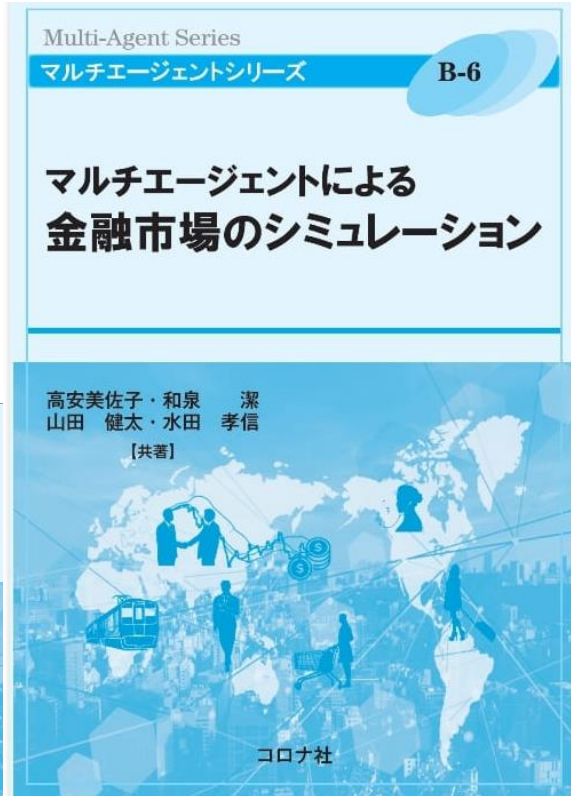
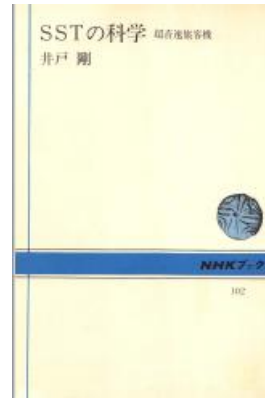




# 経済学 の宇宙


岩井克人

岩井克人著  
経済学を越えて  
人間の可能性を探る






$\pi$ : A Biography of the World's Most Mysterious Number  
**不思議な数  $\pi$  の伝記**  
 Alfred S. Posamentier  
 Ingmar Lehmann  
 松浦俊輔 訳



数学のいたるところに顔を出す  
 不思議な数  $\pi$  の歴史と生態を探る  
 数学者を魅惑しつづけてきた  
 $\pi$  の魅力つきない世界

1981年刊 定価 680円(税別)

新版 **1,2,3... 無限大**  
 ジョージ・ガモフ 著 藤村龍雄 訳  
**One Two Three...Infinity**  
 Facts and Speculations of Science  
 George Gamow



マイクロ宇宙からマクロ宇宙まで、  
 科学の楽しさをたっぷり味わえる  
**不朽の名著!**

**宋銭の世界**

宋銭の流通から、東アジア海域世界を考察。

伊原弘(編)

中国・宋王朝によって製造され、日本をはじめアジア諸国へを流通した「宋銭」がアジア域の経済史に多大な影響を及ぼした国際通貨に注目し、10ヶ国13地域のアジア史を研究

== 私の twitter から関係しそうなものを抜き出したつづやき全部(既出もあります) ==

## A I 監獄ウイグル

<https://www.shinchosha.co.jp/book/507261/>

2023/4/20

近々、人工知能に関して講演をする予定があるので、そろそろこちらでもチェックしておかないと思ひ、三分の二くらい読み終わったんだけど、普通に怖すぎて寝れなくなりそう。もうリタイアしようかなあ、マジで読むのきつい、、、。

## ナガサキ 消えたもう一つの「原爆ドーム」

原爆ドーム 物産陳列館から広島平和記念碑へ

<https://books.bunshun.jp/ud/book/num/9784167838683>

<https://book.asahi.com/article/11589875>

2023/3/30

長崎の原子爆弾投下で破壊された教会(浦上天主堂)を遺構として残さなかった経緯を書いた本。終戦後約 10 年そのままだったが 1.共産主義者がシンボルとして悪用しそう 2.信者が早期の祈る場所の再建を望んだ 3.米国が日本を西側に留まらせるために猛烈に接待した、などが理由

<https://books.bunshun.jp/ud/book/num/9784167838683>

理由は複合的で複雑。一言では言えない。ただ、上記の 1.2.3.の順で理由としては大きいと感じた。終戦約 10 年後は日本国内でも共産主義者が多く、それを抑え込むために日本政府は必死だった時代。浦上天主堂の遺構が反民主主義のシンボルになることは避けたかったのが最大の理由と思う。

2.の信者の意向も大きい。10 年もお祈りする場所がなかったわけで、長崎と言えどキリスト教徒は少数派で、偏見を持たれる中で、他の場所に再建する話もなかなか進まず、我慢の限界だったのだろう。

3.は 1.と関連してて、米国は日本政府とやりたいことは一致していたが、地方自治体とは必ずしも一致しておらず、米国が地方自治体の長などを接待して機嫌を取った。首長の最終決断という意味ではこの 3.が一番大きい。当時の長崎市長はホワイトハウスに招かれアイゼンハワー大統領と会った可能性すらある

この接待というのは、例えば長崎市長の場合、視察という名の 1 か月弱の米国周遊旅行で各地で大歓迎を受けたとのこと。現代ではなかなか考えられないが、海外旅行が難しいこの時代だとなおさら。ワシントンにも立ち寄っているがなぜかその日の動きだけ記録がないらしい。

比較のため広島ドームが遺構となるまでをまとめたこの本も読んだ。こちらの保存が決まったのは終戦後約 20 年経っていた。復興が進む中でもがれきのままのものは多く存在していて多くの場所が自然発生的に観光地となっていた。ここまでの流れは長崎と大きく変わらないだろう。

<https://book.asahi.com/article/11589875>

広島でも多くのがれきは撤去され遺構として残されなかった一方、広島ドームは、1.川を挟んで立っており優れた写真スポット 2.再開発計画の中で邪魔にならない場所に立地 3.もともとは物産陳列館という産業界の施設で思想的なものが一切ない 4.たまたま良い保存方法が見つかり長く保存できそうだった

という感じで非常に多くの条件がたまたまかさなり、原爆ドームは残されるという奇跡が生まれることとなった。そう考えると長崎の浦上天主堂が残されなかったのはそんなに不思議なことではない。そして、東日本大震災から 12 年たつが、これから遺構の話が出てきてもおかしくないと思った。



<https://www.keisoshobo.co.jp/book/b588087.html>

2023/1/30

だいぶ前に読了。非常に勉強になった。研究の前提となっている考え方の違いで、モデルはどうあるべきかなど変わってくるが、その前提の違いがあるとも知らず、不毛な議論が起こる場合がある。皆がどのような前提の違いがあるのかわかっていれば不毛な議論は回避できると思った

序章より抜粋：「社会現象はそもそもどのようなものか、社会現象を研究するにあたり社会学者は個人と社会のどちらに注目すべきか、社会科学の目的や方法と自然科学の目的や方法には違いがあるか、社会科学の目的や方法はどのようなものか、社会学者の価値観と研究はどのように関係しているか」

例えば、経済学において、合理的経済人の仮定はお互いにこのような前提の違いを理解しないと不毛な議論をよぶだけ。合理的経済人は、社会科学の道具主義に立脚していて、真実を表しているかどうかは関係なく、構築されたモデルが何かしらの役に立てばよい、という立場で使われている。

枢密院 近代日本の「奥の院」

<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000367703>

2022/10/23

読了。明治維新からさまざまな権力争いのバランスを取りながら民主化を少しずつ進めるも、政治の仕組み・制度が複雑化するばかりで、どう意思決定されているかも分からなくなり、組織としては微妙な意思決定が積み重なり、最後、太平洋戦争を迎える様子が良く分かった。

この本を読んで、戦前の日本は、政治の仕組みや制度が複雑すぎて誰がどう意思決定されているのか全く分からなくなり、個人でどうこうできるものでもなかったと思った。どんなに優れた人が特定の地位についてたとしても、結果はそう変わらなかったらと思う。どうにもならない政治制度だった。

歴史を語る際、だれがこういう人だったから、この決断がと、個人の性格や能力に注目されがちだが、私は研究テーマの関係から仕組みや制度に着目するようになった。実際、制度が結果の多くを決めていると思う。経済学的に言えば制度学派というのに近い。制度がうまくなければ誰がやっても機能しない。

例えば、全体主義を主導した人がどういう人だったかとか、あいつはけしからんという話よりも、どのような社会情勢や社会の仕組みだったからこういう考え方が生まれたのが重要かと思う。その背景なら、その人がやらなかったとしても、結局は誰かが同じようなことをしていたらうから。

現在の民主主義もガラス細工のように細部がうまく組み合わせあって、うまく機能しているのであって、それを支える日ごろは意識していない意外な細部が失われるだけで、民主主義全体が崩れ去る恐れもある。その複雑な構造を理解せず無知の善意で制度改定を主張するのは、最悪の結果を招くかもしれない。

プラトンの哲学

<https://www.iwanami.co.jp/book/b226343.html>

2022/9/14

アカデミア(学術研究)の起源：プラトンは、なぜソクラテスが「哲学」という理由で死を被ったのかを、冷静に見つめました。その一因をこう推測したはず。街角で出会った相手に、人々の前で思想や人生を問う吟味は、当人にも周りの人々にも素直に受け入れられず、

多くの誤解を生んでしまう。また、それを真似して有力者を論破する若者たちも生み出してしまった。ソクラテスが死刑を受けたのは、哲学のやり方が直截過ぎたからではないかと。プラトンは、師が冒した危険を避け、より永続的で純粋に哲学を遂行する途を探ります。

それは、独立で自由に言論を語る空間の創出でした。人々が金銭や名誉を追求し政治闘争に現を抜かず街のただ中で、ソクラテスのように無防備に哲学の言葉を発しつつけることは、もはや困難に思われました。彼の刑死を契機に、プラトンは祖国の政治

から身を遠ざけます。

そして、ソクラテスが見本を示した哲学に従事し、政治や人生を正しく考察するために、アテナイの街区を離れて学問との共生の拠点を構えるのです。その土地がアカデメイアでした。

信原幸弘「強いAI」国際哲学研究, 別冊 13, 2020

<https://doi.org/10.34428/00011545>

[https://twitter.com/takanobu\\_mizuta/status/1513797863645794304](https://twitter.com/takanobu_mizuta/status/1513797863645794304)

【近刊】5月16日(月)発売予定『経済学の哲学入門』(ダニエル・ハウスマン著 橋本努監訳 ニキリンコ訳) 近刊情報を公開しました。

「選好」という言葉で、経済学は何を考えているのか? 経済学について従来の語りとは一線を画して科学哲学的に迫る、初の経済学入門。

<https://www.keisoshobo.co.jp/book/b605262.html>

イェール大学流投資戦略

<https://www.panrolling.com/books/wb/wb310.html>

2022/7/10

読了。正直読み始める時は期待してなかったが非常に勉強になった。投資とはその目的に応じて行うべきことであると、本質を非常に的確に説明してるし、投資家と運用会社のあるべき関係も的確。運用会社の人はもちろん、個人投資家にも大学関係者にも役立つ内容。

しかし、電子版読んでたから気づかなかったが504ページもあったのか。なかなか読み終わらないはずだ。夜寝る前に少しずつ読んでいたこともあり、半年もかかってしまった。丁寧に読んでいた結果とはいえ、。。。

この本を参考文献の1つとして大学運営、学術界の在り方について論じるレポートを書こうと思って読んだのだが、あるべき投資についても書けそうだな。ちょっと考えておこう。しかし、「パッシブ運用と逆張り戦略が成功への近道！」という副題は原著にはないんだけど、本文とあってないな。

「パッシブ運用と逆張り戦略が成功への近道！」だけど、適当にアクティブを選ぶくらいならパッシブの方が良いと説き、どのアセットクラスがアクティブ向きか、どうやって選ぶべきか書いてある。また、逆張りといってもアセットクラス間のリバランスのことで、下がったものを買おうという意味じゃない。

2022/4/27

自分が書いた文献が何百年と残るだろうかと考えることがある。ほとんどが印刷もされず電子データがあるだけだから何かの拍子に消えるかも。とはいえ現代の紙もそんなに長くもつ感じじゃない。やっぱりギルガメシュ叙事詩のように石板や粘土板に彫っておくのが最強かな?

ドイツ革命——帝国の崩壊からヒトラーの登場まで

<http://www.gendaishokan.co.jp/goods/ISBN978-4-7684-5846-4.htm>

2021/8/12

寝る前に本を読んでも(1)毎日読みたくなるくらいには興味がある(2)すらすら読めるが眠たくなるくらい難しく起伏がない(3)反省で緊張せぬよう仕事や育児などには関係ない: 3つそろうのは難しい。昨日読み終わったこれは良かった。毎日数ページで寝られた。今日からどうするか

これ一冊で4か月くらいかかった。知らないことばかりで興味深くてとても面白かったが、起伏はなく、ややこしい状況を容赦なくそのまま記述しているのですぐ寝れた。変に主張や要約がなく素晴らしい。実生活に全く関係なく気楽に読め、最高の入眠前の本だっ

た。(ちなみにヒトラーはほとんど出てこない)

フラッシュ・クラッシュ Flash Crash たった一人で世界株式市場を暴落させた男

<https://www.kadokawa.co.jp/product/321707000030>

2021/3/21

読了。これは良書。この本は長年相場操縦を行っていた犯罪者である個人投資家の話。なぜこのタイトルかといえば、逮捕時は彼がフラッシュクラッシュを引き起こしたと大々的に報道されたから。司法当局は初めからあまり関係ないと思ってたし判決でも関係は肯定されていない。

フラッシュクラッシュに関しては知らないことは何も書いてなかった。さまざまなことが複合的に起こったという従来から知られている記述をそこそこしただけ。一方で、この時人々やメディアがどういふ誤解をしていて、当局関係者が何も分かっていなかったかを冷静に記述していて、なかなか良い本と思った

そして、フラッシュボーイズという書籍が発売され、世間では、高頻度取引業者(HFT)を悪者と決めつけ、個人投資家が損害を被っている正義側というレッテル付けが行われた経緯を淡々と記述している。当然だが、投資家に正義も悪もない。この本は、そういう安易なレッテル張りから完全に距離を置く良書。

メディアはレッテル張りが好きなので、メディア出身者が書いていることでこの辺りは心配だったが、その心配は全く必要なかった。映画化されるさいには、そのあたりは心配。変な脚色は加えないで欲しい。映画だと一般人でも盛り上がるように、どうしても正義と悪に分けがちだからマジ心配。

彼は見せ玉によって相場操縦をしていたわけだが、よく捕まえたなあと思う。見せ玉は操縦の意図がないと立件できないのでハードルがめちゃくちゃ高い。いろいろ偶然もあり、捕まえることができた経緯が良く書かれている。

ちなみに全く知らなかったが、HFT 業界が見せ玉の取り締まり強化を当局に要望していたことが驚きだった。つまり、HFT の戦略は見せ玉に弱いのだろう。そんな戦略の弱点をばらしてまで要望したといふことは、相当な弱点だね。そして、ほとんどの HFT が疑われる行為を行っていないということだろう。

もう一つ驚きだったのが、当局は初めからこの犯罪者を捕まえたら彼から見せ玉の手口をレクチャーしてもらおうとしていたこと。これは司法取引にも含まれていて、この"並外れた協力"によって彼は禁固刑を免れている。

<https://jp.wsj.com/articles/SB10247073794036763582404586142981636658592>

彼のレクチャーのおかげで米国での相場操縦の立件が増えたらいい。素晴らしいね。捕まえたのは個人投資家はもちろん、HFT 内部にもいたらしいから、やっぱり、どんな属性の投資家でもルールを守っている人は守っているし、守っていない人は守っていない、ってことだね。

マルチエージェントのための行動科学：実験経済学からのアプローチ

<https://www.coronasha.co.jp/np/isbn/9784339028164/>

2021/3/21

こちら読了。被験者を集めた仮想的な市場実験で、ファンダメンタル価格を全員知っていてもバブルが起き、しかも、認知テストのスコアが高い人は他の投資家の戦略が不確実なとき割高の予想をした。つまり、投資家が賢くなってもバブルはなくなる。

ちなみにこの研究は <https://doi.org/10.1111/ecoj.12338>

ノーベル経済学賞の Smith 以降発展した市場実験研究が多く紹介されていたが、私にとってはこの研究がぶっちぎり重要。

なお、実験市場の価格推移を再現するエージェントシミュレーションも紹介されていて、順張りのエージェントが必要とのことで、人工市場研究への示唆も大きい本だった。3章、4章、9章が私にとって重要な章だった。

科学哲学への招待

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480095756/>

2021/2/15

読了。科学的に議論するとは、そもそもどういふことなのかがよくわかる本だった。何かしらの科学の研究者にこそ読んでほしい本。

●●科学の研究者でもこのレベルで科学的とは何かが分かっている人は多くない。みんながこのレベルで理解すれば不毛な議論はもっと減るはず。

基本的に科学哲学の本ではあるが、哲学に関してはまるで触れたことがない人向けに書かれていて、非常に読みやすい。科学やってるけど哲学は触れたことない人向けと思う。

\*その後セミナーが開かれる

<https://www.eaa.c.u->

[tokyo.ac.jp/?s=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%93%B2%E5%AD%A6%E5%8F%B2%E3%82%92%E5%86%8D%E8%80%83%E3%81%99%E3%82%8B](https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/?s=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%93%B2%E5%AD%A6%E5%8F%B2%E3%82%92%E5%86%8D%E8%80%83%E3%81%99%E3%82%8B)

世界哲学史 別巻 ―未来をひらく

<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480073648/>

2021/1/31

世界哲学史別巻、読了。シリーズ最終 8 巻が昨年 8 月にでたばかりだが、早くも同月に編者が山の上ホテルという渋い場所に集まり、シリーズ総括、反省を収録した前半と、それを受けて追記された短編章たちの後半で 12 月発売というスピード。世界哲学史は現在進行形で作られている

ロシア、イタリア、モンゴルなどの現代哲学という、日ごろあまり触れないものも載っていてかなり勉強になった。一方、ナチスの農業大臣が唱えた思想がひどすぎでびっくりした。ナチス内部からも批判があったというおぞましいもの。これがまだ 100 年もたっていないと考えると身の毛もよだつ。

ちなみに山の上ホテルのページ、渋すぎる。いつかはここで小規模研究会とかやってみたい。「東京の真ん中。文豪たちに愛されるホテル。川端康成さん、三島由紀夫さん、池波正太郎さんをはじめ数多くの作家の方々に愛され、定宿としてご利用いただいた山の上ホテル。」

<https://www.yamanoue-hotel.co.jp/concept/>

統計学を哲学する

<https://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-1003-0.html>

岩井克人「欲望の貨幣論」を語る

<https://str.toyokeizai.net/books/9784492371244/>

2020/12/28

読了。思いのほかサクサク読めた。「お金とは何か」をここまで鋭く掘り下げられる人も他にはいないだろう。とても勉強になった。BS の放送も良かったけど、私はこの書籍版のほうが良かったかな。

通貨・租税外交 協調と攻防の真実

<https://bookplus.nikkei.com/atcl/catalog/2020/9784532358594/>

2020/12/20

読了。意外にサクサク読めた。グローバル企業の税金逃れはここ数年くらいで急速にできないように仕組みができてきている。すごく政治的に大きなテーマだっというのがよくわかった。語り手の浅川先生のその後のご活躍が分かって良かった。

世界哲学史 8

[https://www.chikumashobo.co.jp/special/world\\_philosophy/](https://www.chikumashobo.co.jp/special/world_philosophy/)

2020/10/20

ようやく全巻読破。第8巻は現代哲学史で、哲学と真ん中の認識論や存在論を中心に紹介されていて、全く意味不明。歴史の紹介なのに。現代哲学は自分が専門だったり興味ある分野（私の場合モデルの哲学や政治哲学など）以外、無理。

ただ、アフリカの哲学者がヨーロッパ近代哲学を徹底的に批判しているという話は興味深かった。植民地主義を止められなかった哲学をアフリカの人が批判するのは当然だよな。日本にもそういう考え方、もっとあっていいと思う（帝国主義をまねてしまったという意味で）。

そういう意味では近代以前の哲学は、もう間違ってしまったという前提で、歴史的な経緯をしる感じで読むって感じしかないかな。あんまり、正しいものとして受け止めるべきでないというか。

とはいえ、現代のど真ん中哲学は意味わかんないんで、まあ、専門分野、興味のある分野をさらに深めるために、たまたまその分野の哲学が必要になったらやる、たまたま哲学的な論争に巻き込まれたら応じる（ダーウィンみたいな）、みたいなものしかないかな。

ちなみに、全8巻読み終わったと、好評につきもう一巻、別巻が1つ12月に出るらしい。まだ終われない。

参考：現代思想

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E6%80%9D%E6%83%B3>

2020/9/20

6巻7巻読了。近世・近代の哲学史。長かった中世からの脱却、現代への過渡期にも見える。そして、一步先にでたヨーロッパに追いつこうとするその他の地域。そのため、その他地域がどうヨーロッパに追いつくかみたいな話が多かった。

その他地域はアリストテレスを知らないからかえって足かせなく、すばやく近代化できたみたいな話もあった。欧州中世を否定するのに必死で、それを知らない人にとってはかえって分かりにくい。なるほど、これまでのことを知らないほうがかえって新しいことを吸収できるというのはあるかもしれない。

科学と哲学が分離し始めた時代と言われるが、どちらかと言えば、科学的発見が哲学に修正を迫ったと言っていいだろう。ダーウィンなんかは典型。ダーウィンは科学的な発見を解釈する際、これまでの哲学に修正を迫る必要が生じた。本人が希望したかどうかは分からないが、哲学論争に巻き込まれた感もある

いずれにせよ、何かの必要があって哲学を勉強するときは、哲学の歴史を知っておこうという感じの場合を除けば、現代からのほうがよいと思った。例えば、科学哲学ならポパーやクーン以降、政治哲学ならロールズ以降でいいと思う。最後の第8巻は現代哲学史。楽しみ。

2020/8/24

私が時々哲学を勉強するのは、専門でもなく趣味でもなく、仕事や研究で必要だから。哲学はよく誤解受けているけど、“現代の”哲学は実用的だし、専門的な議論するときにお互いそもそも論のところをつまずかないために重宝する。科学哲学の一部であるシミュレーションの哲学を勉強して本当にそう思った。

シミュレーションの哲学はこれを読んだ。授業でもよく引用して時間使って説明するけど、その部分はむしろ先生方に好評だったりする。

<https://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-0872-3.html>

あと、金融や経済は割と不毛な議論多い気がする。例えば、効率的市場仮説の議論がいかにも不毛だということが、科学哲学を勉強すると割と理解できる。現代の科学哲学は一般にイメージされる哲学とはかなり違って、そもそも科学的に議論するとか、仮説はどうあるべきかと言った実践的なものも多いよ。

伊藤幹夫、効率的市場仮説をめぐる論争はなぜ決着しないのか、三田学会雑誌(慶應義塾大学), 2007

[https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara\\_id=AN00234610-20071001-](https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20071001-)

0211

2020/8/19

[https://twitter.com/takanobu\\_mizuta/status/1296031212171980805](https://twitter.com/takanobu_mizuta/status/1296031212171980805)

当セミナーの Slack ワークスペース上に、哲学研究者を目指している人、大学・大学院で哲学を学んでいる・学びたいと考えている人向けの先輩相談室チャンネルを作成しました。進路や勉強の相談、情報共有に使ってください。

<https://philosophy-online.slack.com/?redir=%2Farchives%2FC0193VBKB8T>

2020/8/19

[https://twitter.com/takanobu\\_mizuta/status/1296031212171980805](https://twitter.com/takanobu_mizuta/status/1296031212171980805)

当セミナーの Slack ワークスペース上に、哲学研究者を目指している人、大学・大学院で哲学を学んでいる・学びたいと考えている人向けの先輩相談室チャンネルを作成しました。進路や勉強の相談、情報共有に使ってください。

<https://philosophy-online.slack.com/?redir=%2Farchives%2FC0193VBKB8T>

2020/8/14

こちら第 5 巻読了。近世の哲学。大航海時代や技術革新に伴い哲学も大変化。とはいえ現代からみると議論の仕方はまだ滑稽さも。でもね、扱っている議題は今風に言えば、「宇宙の始まり」と「意識とは何か」。今でも解かれてない難問。今も昔も難解だけど果敢に挑むのは哲学。

そういう意味では、現代の「宇宙の始まり」や「意識とは何か」の議論は、次の時代から見ると滑稽に感じられるのかもしれない。まあ、現代が終わり次の時代が来ること自体があんまり想像できないけど、、、。

2020/7/25

こちら第 4 巻読了。そうは言っても中世は聖書とアリストテレスという権威的な書物が足かせになって全く新しいものが出にくかったと思う。時代ごとに、権威をもつ理論や考え方を批判しづらくなり、それが足かせとなって発展が遅くなっている分野であると思う。

2020/7/1

こちら第 3 巻読了。中世っていうのは政治が宗教や哲学と結びついた時代、というよりも結びつけないと統治してられないという時代だったのだろう。純粹哲学は教養として、学問の入り口で別物として勉強する、という雰囲気だったみたい。4 巻は 13 世紀。

2020/6/4

Philosophy of the Social Sciences に Shu-Heng Chen 先生の経済学におけるエージェントシミュレーションの哲学的論考（と思われる）が載ってた。っていうか Philosophy of the Social Sciences とか雑誌があるんだね。スゲー。

<https://doi.org/10.1177/0048393120917641>

2020/5/31

なかなか時間が取れず読めてなかった先月号のニュートンの哲学特集、中世から近世にかけて神学と哲学は分かれ、哲学と科学は分かれてないという解説があった。今は、哲学と科学が分かれているという意味だが、哲学にも当然いろいろあって、科学哲学は今こそ、科学者は学ぶべき領域とも思った。

科学にもいろいろあって、そんなに科学哲学が必要ない分野もある。一方で、科学者が、科学哲学を研究するとまで行かなくても勉強はすべき分野もあると思う。私が専門のシミュレーションも哲学が必要な領域。シミュレーションの哲学を勉強してないシミュレーション研究者は、不毛な議論をしがち。

とはいっても私もきちんと読んだシミュレーションの科学哲学の本はこの一冊だけ。でもこの一冊で超勉強になった。「モデル」や「シ



ミュレーション」とよばれるものを扱っている人は必読： 科学とモデル シミュレーションの哲学 入門 マイケル・ワイスバーグ 著 松王政浩 訳

<http://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-0872-3.html>

後は私は良く知らないけど、統計にも哲学もある。統計もいろいろ不毛そうなもめごとを見るけど、哲学が足りてないんじゃないかと想像してる。科学と証拠統計の哲学 入門 エリオット・ソーパー 著 松王政浩 訳

<http://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-0712-2.html>

2020/5/29

こちらの第2巻も思いの外早く読み終わった。キリスト教が広がり始めたころの話。このころは哲学と宗教は密接だった。ライバルの宗教との論戦は哲学そのものだった。ここからどのように中世につながっていくのか楽しみ。というわけで3巻も買っちゃったよ。

2020/5/5

こちらの第1巻、思いの外早く読み終わった。「哲学」ではなく「哲学史」だから"比較的"読みやすい。これまで地域ごとに分かれていた哲学史の研究がようやく統合され始めた感が分かった。この統合を進めるには日本は優位性あるかもって感じた。第2巻も読んでみるか。

引用：「世界哲学」は、二〇一八年八月到北京で開催された世界哲学学会大に向けて、日本の哲学界が打ち出した理念である。一九〇〇年のパリ大会以来、世界の哲学者が集い議論する場となってきた世界哲学学会は、一二〇年ちかい歴史で、いまだ日本で開催されていない。

引用：「世界哲学」を推進するにあたり、日本が先導すべき具体的プロジェクトとして焦点を当てたのが、「世界哲学史」である。日本では各地域・文化の哲学史研究が充実しており、それらの専門家を糾合して全体像を作り上げることが、世界哲学の基盤となるのではないか。

2020/5/3

ニュートンの哲学特集読んでたらラファエロのこの絵の解説がでて、この絵、重要だった。たぶん、ヴァチカンにある本物を見たことがあるんだけど、あの時は分かってなかったから記憶に残ってないんだよね、、、ちゃんと理解してみるべきだったなあ〜。

<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%86%E3%83%8A%E3%82%A4%E3%81%A E%E5%AD%A6%E5%A0%82>

2020/4/25

これがコンビニにあって異彩を放っていた。とはいえ、ニュートンなので哲学の中でも科学哲学寄りで、哲学史的な内容なので"比較的"気楽に読める内容のようです。

[https://www.newtonpress.co.jp/newton/back/bk\\_2020/bk\\_202006.html](https://www.newtonpress.co.jp/newton/back/bk_2020/bk_202006.html)

2020/4/18

気になってた「世界哲学史 1」を恐る恐る読み始めたが意外に読みやすい。「哲学は西洋に偏っていて普遍性がないのでは？」で始まるけど「そもそも普遍性とは何か？」ってなり「『哲学には普遍性が必要』とする哲学には普遍性はないのでは？」と、なかなか本題が始まらない。

「学問としての哲学は、現在、ほとんどの人を寄せ付けないほど特殊で、難解な専門用語を駆使する学問と見なされている。だが、それは本来の哲学であるのか。あらためて、根源にもどって考えるべき時ではないか。」

「人類が言語を語り、思考するようになって以来、なんらかの哲学の営みは始まっていたはずである。」

「世界哲学とは、哲学において世界を問い、世界という視野から哲学そのものを問い直す試みなのである。そこでは、人類・地球といった大きな視野と時間の流れから、私たちの伝統と知の可能性を見ていくことになる。」

「西洋哲学者たちが本当に異文化を理解し、評価できていたのかは、二〇世紀の文化人類学やポストモダンがあらためて問うた問題であるが、彼らの限界は理念上だけではなく、実際の経験や知見の限界でもあった。」

欲望と幻想の市場 - 伝説の投機王リバモア

<http://www.tradersshop.com/bin/showprod?c=9784492061114>

2020/4/17

読了。100年近く前に書かれた本の翻訳。私は投機は詳しくないが、雰囲気分かり勉強になった。投機の本質は今も昔も変わらない。ただ、規制は変わった。風説の流布、インサイダー取引、相場操縦、これらがまだ許された時代のとんでもない話から、規制の必要性が理解できた：

教養としての「フランス史」の読み方

<https://www.php.co.jp/books/detail.php?isbn=978-4-569-84369-8>

2020/2/24

読了。フランスは王政、帝政、共和制と何度も変わった、ある意味日本と対照的な歴史をたどった国。しがらみを無視した理想論でもダメで、でも、理想を持たない現状維持もダメで。そのときそのとき、いろいろ複雑な利害関係があって、何とかまとめていく。そういう歴史だった。

2020/1/25

世界哲学史 全8巻か、、、興味深いが、8巻もあるのかあ、、、：筑摩書房 新シリーズ、ついに始動 世界哲学史 執筆者総勢101名の叢智が集結

[https://www.chikumashobo.co.jp/special/world\\_philosophy/](https://www.chikumashobo.co.jp/special/world_philosophy/)

初めのところが試し読みできるようになった。これは深そう。：世界哲学への挑戦は、私たちが改めて「哲学とは何か」の問いに晒すことになる。

<https://www.webchikuma.jp/articles/-/1930>

国王—スペイン国王ドン・ファン・カルロス1世との対談

<https://amazon.co.jp/dp/4072148474>

2019/11/28

古本で買ったこの本、すごく面白い。

スペインの前国王（執筆時は現役）へのインタビューだけど、こんな激動があったとは。映画化してほしいよ。スペインのこのころの歴史を少し知らないと楽しめないの以下で予習した

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%AD%E3%82%B91%E4%B8%96\\_\(%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%A4%E3%83%B3%E7%8E%8B\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%AD%E3%82%B91%E4%B8%96_(%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%82%A4%E3%83%B3%E7%8E%8B))

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%82%B9%E3%82%B3%E3%83%BB%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B3>

12/1

読了。やっぱり映画化したらダメだね。映画だと正義側と悪側に分けたがるから良くない。現実はずっと複雑で分けられない。みんな良いと思いついてやってるし、きれいごとでは解決できず、内戦回避がそれ以外方法がなかったとか、深く知らなければ分からないことが多い。分かりやすく表現したらダメ。

狂気の投機史 人はなぜお金が絡むと愚行に走るのか？

<https://www.tradersshop.com/bin/showprod?c=9784775972335>

2019/11/20

この本やっと読み終わった。バブルの歴史は同じことの繰り返しで、途中で退屈になって読むのが遅くなった。逆に言えば、歴史から学べることが多いということ。とても勉強になった。まず、バブルが起きた後の痛手は必ず大きく、起きないほうがいいということ。

そして、風説の流布、インサイダー取引、買い占め、相場操縦、などがセットで行われ、ひどい市場になるということ。近代まではこれらは禁止されていなかった（悪いことだと思われてなかった）し、きちんと取り締まるようになったのは意外に最近のこと。これらを禁止する意義が良くわかる本だった。

この本の原著は 1999 年に書かれていて日本の不動産バブルが最後に出てくる。近世のチューリップバブル以降のさまざまなバブルで起きたひどいことが全て起きた、まさに本書を締めくくるにふさわしいバブルだった。国を挙げて行われた相場操縦はうまくいかず、最悪の結果を招いた、という書きぶりだった。

あと、確実に言えることは、市場は少しづつ良くなっているということ。ここでいう良いというのは株式市場であれば、市場の本来の目的である企業を売買する場であるという機能が高まり、企業価値に基づいた価格で取引されやすくなるということ。企業価値とは関係のないマネーゲームは確実に減っている。

ホワイトハウスのキューバ危機—マルチエージェント・シミュレーションで探る核戦争回避の分水嶺

[https://jwww.iss.u-tokyo.ac.jp/publishments/books/2012/hoshiro\\_2012\\_03.html](https://jwww.iss.u-tokyo.ac.jp/publishments/books/2012/hoshiro_2012_03.html)

2019/11/25

読了。非常に面白かった。他の分野のエージェントシミュレーションの話はその分野が分からなくてつらいことが多いけど、これは分かりやすかった！話し合ってるだけだから。極端な主張をする人が混ざると、反対側の極端な結論になる可能性が増えるのが創発的で興味深かった。

2019/9/22

ギリシャ哲学の本を読んだ直後だと、授業参観で見た小 2 の道德の授業が全く理解できなくなっていた。そんなに普通に考えていいのだろうかと疑ってしまう。良くない。

現代経済学

<https://www.chuko.co.jp/shinsho/2018/08/102501.html>

2019/8/1

読了。非常に面白かった。最先端の広大な経済学を広くカバー。人によっては難しく感じるかもだけど、紹介している文献には超難解なものも含んでるから、そうとう分かりやすくなっていると思う。この守備範囲の広さは瀧澤先生じゃないと無理だろう。

実際、瀧澤先生に薦められて読み始めたものの全く分からずに放り出してしまっていた本の解説も含んでおり、何を取り扱った本なのか分かったものもあって非常に助かった。ダグラスノースとか何の研究してるのかやっと分かったし。まあ、ヘーゲルの哲学を導入したところは結局分からなかったが。

終章に書かれている、"もはや経済学を法則定立的な科学と見る見方を維持することは難しく、現在の経済学が持つ不十分なところを法則定立的な仕方でも再建しようとする試みは成功しないだろうということである。"、

"経済政策の提言を行う人は、経済学の理論モデルとメカニズム、そして現実世界との厄介な関係に関するメタレベルでの理解を前提としたうえで、理論モデルを活用できなければならないということである。"、

"経済学には、相互に矛盾しあう可能性のあるモデルがいくつも存在し、それぞれに役割を果たしている。"、"一つのメカニズムで経済現象全体を網羅することは到底不可能であり、われわれは多くのメカニズムを提案することによって現実の経済現象をカバーしようとしている。"、あたりは名言と思う。

2019/7/15

"経済学という学問については、今日あるような一つの領野を形成したのが一九世紀末期という比較的新しい時代に属していること、その対象や方法は背後にある哲学や思想、時代の影響を受けて、常に変化してきたことを意識するのが重要である。一

経済理論の終焉金融危機はこうして起こる

<http://www.panrolling.com/books/wb/wb273.html>

2019/7/9

読了。経済学の数理モデルの限界を説明しエージェントモデルを絶賛した本。当たり前のことを繰り返し大げさに書いてるし、提示したエージェントモデルもしよぼかったが、大変面白かった。ここまで書かないと主流派モデルの限界が分からない信者が"米国には"多いことが分かった

ある経済学の研究者が言っていたが、米国には主流派モデルを信仰しているとか思えない信者が多いらしく、日本は少ない（いないわけじゃない）と。そもそも"主流派"って言葉が存在すること自体、学問としておかしいと思うんだけどね。

その主流派モデルは、有効な使い道があるから今があるわけだし、当然限界もある。それが分かった上で使っている人が大半と思うけど、信仰に走っちゃう人もいるんだよね。エージェントモデルも数理モデルとは違う使い道があって一長一短。お互い補い合うべきだし、使える手段はすべて使うべき。

そういう意味ではこの本は米国で生まれるべくして生まれたって感じなのだろう。日欧ではこういう本は出てこないと思う。ここまで言わなくてもエージェントモデルの使い道は分かっているし、すでに広がっているから。この本は逆に見れば、エージェントモデルを信仰しているような、気持ち悪さもあった。

2019/4/6

小2の娘と家内から少し早い誕生日プレゼント。右の2冊が娘の、一番左が家内のチョイス。娘は私がいつも本を読んでいるから本をプレゼントしたいと。家内からは娘に選ばせて大丈夫かと内々で相談があったが、どんな本でも娘が選んだ本なら一生懸命読むからと答えておいた。いい本がそろって良かった！

左から、

不思議な数nの伝記 <https://nikkeibp.co.jp/atclpubmkt/book/05/P82450/>

新 版 1 、 2 、 3 … 無 限 大 <http://hakuyo-sha.co.jp/science/%E6%96%B0%E7%89%88-%EF%BC%91%E3%80%81%EF%BC%92%E3%80%81%EF%BC%93%E7%84%A1%E9%99%90%E5%A4%A7/>

宋銭の世界 [http://bensei.jp/index.php?main\\_page=product\\_book\\_info&products\\_id=3210](http://bensei.jp/index.php?main_page=product_book_info&products_id=3210)

一番難易度が高そうな「宋銭の世界」から読むことにした。これは完全な学術書。中世アジアの国際通貨であった宋銭に関する歴史学上の未解決問題の紹介から始まっていて読むの大変そう。小2の娘は私の仕事がお金に関するものと思っていて、表紙にお金っぽいものがあるというだけで選んだようだが、

このあたり、お金の本質を表していると思う。

短陌（96文の束をもって100文と見なす習慣）が行われた理由は諸説あることをひたすら述べた章があったが、難しすぎてほぼ分からなかった。Wikipediaを調べたら、まさに今読んでいる「宋銭の世界」が引用してあって同じことが書いてあった。他に文献がないのだろう。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%AD%E9%99%8C>

「宋銭の世界」読了。どのお金が使われるかは、便利だと人々が思うもの。常にさまざまなお金同士が競争しあっていた。どれが生き残るかは創発的で社会情勢や技術革新などもかわり、まさに複雑系。意外に細かい事象が全体に影響を及ぼすことも。政権がこれを使わせたいと規制した場合は失敗が多い。

まさに、神は細部に宿るである。中央銀行の皆様は、発行するお金が使い続けられるように、そして、使える技術はいつでも取り

入れられるように、便利であり続けられるよう、さまざまな努力を絶え間なく行っているのだろう。油断すると、いつ使われなくなるか分からない、そういう緊張感と思う。

ちなみに、伝説的な貨幣コレクターとして田中啓文も出てくる。日本銀行にコレクションを寄付したとのことで、改めて日本銀行貨幣博物館に行けば、もっと興味深く宋銭を見れるだろうなあと思った。 <https://imes.boj.or.jp/cm/collection/>  
江戸時代には既に宋銭など貨幣コレクションが趣味として普及していて、すごいコレクターを番付するということも行われていたらしい。これは番付表なんだけど、ここに出てくる関脇の人がどんなひとか解説もあったりして、マニアックすぎだったよ、「宋銭の世界」。

2019/4/21

「不思議な数 $n$ の伝記」読了。数学の本ということで警戒していたが、おおむね高校数学までしか出てこなくて難なく読めた。英語では $n$ をこうやって暗記するんだね（あんまり暗記する人いないだろうけど）。あと、円周率の歴史を振り返ると、アルキメデスとオイラーが凄いつことは分かったよ。

2019/5/2

最後の3冊目「1、2、3無限大」読了。4章あるが無限大の話は最初の1章のみ。他は相対性理論、量子力学、天文学、生物学など幅広い科学を解説。1947年に書かれた本の翻訳で、もうここまで分かっていたのか、逆にここはまだ分かってなかったんだという意外性が楽しかった。

2019/3/7

例え話に細胞モデルを使うために買った解剖生理学の本、せつくなので全部読もうとしてるけど、こんな複雑な仕組みが自分の体の中で起きていると考えると気持ち悪くなって寝れなくなる。少しずつしか読み進められてない。：（その本とほぼ同じ内容が見れるサイト） <https://www.kango-roo.com/sn/k/view/2348>

意識はいつ生まれるのか 脳の謎に挑む統合情報理論

<https://www.akishobo.com/book/detail.html?id=722>

2019/2/3

この本非常に面白かった。人間の意識があるかどうかを測定する新しい方法には、すごい進歩だと感心した。しかし、意識が何なのかは、ほぼ何も分かってないということも分かった。私自身は、何が分からないかすら分からなくなった、というのが正直なところ。：「ある身体システムは情報を統合する能力があれば意識がある」という仮説、人間に関してはそうかなと思えた。強い人工知能との関係だと、この“身体”をとっても成り立つかが注目かもしれないが、これは全く分からない、というより、全く別の問題。この先に強い人工知能があるとも思えなかった。

大坂堂島米市場 江戸幕府 v s 市場経済

2018/9/7

"市場経済の原理なるものは、目的に適合する限りにおいて容認・保護されるべきものであり、それ自体として尊重されるべきものではない、というのが江戸幕府の立場であった。ここにわれわれが学ぶべき点があるように思う。複雑なデリバティ... <http://a.co/5AtaTwo>

娯楽で何となく読み始めた本だったが、読み終わってみると、実は作者の先生とは研究分野が案外近いんじゃないかと思った。アプローチは全然違うが、解明したい目標がかなり近い気がする。いずれどこかで出会うことになるかもしれない。

科学とモデル シミュレーションの哲学

<http://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-0872-3.html>

2018/7/9

『しばらくするとこの膨大な地図でもまだ不完全だと考えられ、地図学院は帝国と同じ大きさで、一点一点が正確に照応し合う帝国地図を作り上げた。西部の砂漠では、ぼろぼろになって獣や乞物の仮のねぐらと化した地図の断片がいまでも見つかることがある。J.L.ボルヘス「汚辱の世界史」』

ロシア経済改革の失敗—ガイダリズムの終焉とその後

<https://www.amazon.co.jp/gp/product/4478170428/>

2018/5/28

90年代のロシアの経済改革は失敗事例としてよく出てくるので詳細知りたくてこの本読んで。本質は、やるべき改革はあったけど、やる順番を間違え、実行が速すぎたこと。独占を禁止する規制強化の後、価格自由化の規制緩和をすべきところを順番逆だった。しかも急すぎた。

ロシアはIMFの助言に従いすぎた、という感じのことも書かれている。たぶん、当時のIMFは"経済学"は分かっているけど"経済"は分かっていないという感じだったのだろう。

対照的にうまくいった事例としてよく出るのが中国。だらだらと経済改革をやっとうまくいっている。改革は徹底的に素早く、というのは失敗の原因にもなりえるということだろう。この本にも二国のこのような対比が出てくる。

十二世紀ルネサンス

<https://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000151371>

2018/3/12

12世紀のヨーロッパは学術が遅れていたがアラビアから輸入し独自発展させ世界に躍り出た話が書かれた本。しかし読んでみると実はこの時代、当時で千年以上前のギリシャ哲学が読めたかどうか学術で世界に躍り出れる分かれ道だったそうで、ギリシャ哲学どれだけすごいんだ。

特にユークリッドの「原論」が読めたかどうか最も重要だったらしい。ちょっと読んでみるかな。これ、哲学というか数学の本なので、原文読むの無理だろうからこちらの解説本でも読むか。

<https://gihyo.jp/book/2014/978-4-7741-6536-3>

働きたくないイタチと言葉がわかるロボット

[https://twitter.com/takanobu\\_mizuta/status/960849011962884098](https://twitter.com/takanobu_mizuta/status/960849011962884098)

2018/2/6

読了。人工知能と呼ばれるものが具体的にどういう動作をしているのか理解するのに最適な本と思った。日本語の処理を対象としているので数学が必要ないのもいい。人工知能の可能性と限界を知るのにとっても分かりやすい本と思った。：働きたくないイタチと言葉がわかるロボット

科学とモデル シミュレーションの哲学

<http://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-0872-3.html>

2017/7/20

シェリングは、小さな心の傾向を反映した小さな意思決定が集まると、大規模な人種分離の人口統計につながることを指摘し、人種分離に関する説明を行った。そこではモデル状態の時系列やモデルの最終的な平衡状態などは、いずれも説明力を持っていない。説明には、アルゴリズムそのものが必要なのである

シミュレーションモデルにはできて数理モデルにはできないものの事例。「科学とモデル シミュレーションの哲学 入門」より

2017/7/11



この講義資料をそろそろ作らないと。前回の資料に加え、今読んでいる「科学とモデル シミュレーションの哲学入門」から得た知見、「そもそもモデルとは何か?」「この分野におけるモデルはどうあるべきか」を加えようとしてるけど、間に合うかなあ。

## 科学と証拠

<http://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-0712-2.html>

2017/6/20

科学理論はどのように根拠づけられるのか。その根幹を支える統計的推論の枠組みを丹念に検討し、ベイズ主義や有意検定、A I Cなどが抱える本質的課題を浮彫りにする：科学と証拠 統計の哲学 入門 エリオット・ソーバー 著

2017/6/15

3冊お薦めいただいて、残り2冊は以下。しかし経済学者に薦められた3冊のうち2冊が哲学書とは、、、。

現代経済学のヘーゲル的転回 社会科学の制度論的基礎

<https://www.nttpub.co.jp/search/books/detail/100002416>

経済学の宇宙

<https://bookplus.nikkei.com/atcl/catalog/2021/9784532240042/>

昨日教えていただいた本の1つ。シミュレーションをやっているものとして必読と感じた。：科学とモデル シミュレーションの哲学 入門

<http://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-0872-3.html>

2017/4/14

この話題で哲学者パスカルが引用されることは多い：パスカルは今から400年近くも前に、コンピュータの祖先ともいえる「機械式計算機」を作りました。：【挨拶】黒田総裁「AIと金融のフロンティア」（決済機構局・金融市場局合同コンファレンス）

[https://www.boj.or.jp/about/press/koen\\_2017/ko170413a.htm](https://www.boj.or.jp/about/press/koen_2017/ko170413a.htm)

2016/12/18

今日のはかなり久々に、2年弱ぶりくらいに、中小企業診断士の集まりである思想・哲学研究会へ行った来た。普通に楽しかった。日曜日に家を空けるのはなかなか大変だけど、来年は何回か参加しよう。

市場を創る バザールからネット取引まで

<https://www.nttpub.co.jp/search/books/detail/100001751>

2016/7/21

「市場を創る」をようやく読み終えた。やはり名著。古代アテネのアゴラから現代の電子商取引まで、商品市場、企業間競争、金融市場、市場（いちば）、、、形態こそ違うものの、「市場」は「唯一の自然な経済」。それは資本主義が始まる遥か昔から。

市場システムはそれ自体が目的なのではなくて、生活水準を引き上げるための不完全な手段の1つであるが、生活水準の向上をもたらし唯一の信頼できる方法でもある。また市場は万能ではなく、うまく設定されたときのみ、うまく機能する。

市場がうまく機能するかどうかを決定するのは設計の細部である。神も悪魔もともに細部に存在するのである。すでに見てきたように、市場は高度に複雑なシステムである。それは少なくとも物理学者や生物学者が研究してきたシステムと同じくらい複雑である。実際に何が機能し、何が機能しないかを見極めなければならない。このことは改めて言う価値もないほど陳腐なことに思えるかもしれないが、残念なことに、経済問題に関して、詳細な状況よりも先入観にもとづいてなされる主張がいまだによく見られるのである。

市場が常に正しいとか、根本的に悪であるとするような半宗教的な観点に対して、プラグマティックなアプローチを主張してきた。市場は魔法ではないし、非道德的なものでもない。市場は目覚ましい成果を生み出してきた一方で、うまく機能しないこともありう

る。

2015/8/3

[https://twitter.com/takanobu\\_mizuta/status/628002067068510208](https://twitter.com/takanobu_mizuta/status/628002067068510208)

弱冠 37 歳：経済改革の旗手であるフランスのマクロン経財相は、まだ 30 歳代。エリート行政官出身ですが、大学時代は哲学を専攻。昨年 11 月の来日に際して、本人に尋ねました。

Q. デカルトですか？

A. いえサルトルです。

——サルトルといえば、アンガージュマン（現実問題への参加）。

2015/2/22

今日の診断士の研究会である思想・哲学研究会では、文系大学院生から本格的な話が聞けてとても勉強になった。ダーウインの種の起源は初版と最後の 6 版で異なり、生存競争・自然淘汰という論調から、生存戦略・環境適応者生存とう論調に変化し、同じ本なのに主張が大きく異なるという話は興味深かった。

2015/1/25

今日は中小企業診断士の研究会である思想・哲学研究会で、「効率的市場仮説という不毛な議論」という題目で話をします。可能なら、なぜ人類は市場が効率的であるかどうかと不毛な議論をすることになったのか、というところまで議論できたらと思っています。私は解を持ってないので意見をいただければと。

2014/3/30

飛行機で映画ハンナアーレントを見た。哲学者アーレントの深い洞察に考えさせられたし、何より、その洞察をあまり理解できない人たちによる炎上・バッシングの様子が興味深かった。1960 年代の話だが炎上の様子は現代にも通じる。最後の講義の場面は圧巻。でも非常に後味悪く終わる。

2012/11/8

次の思想哲学研究会のネタはこれで行くか。やっと哲学で議論が始まった最先端の医療技術について学ぼうと思ったけど、最先端すぎてまとまった哲学書がない。まずは、ガチの医学書から入るか。発表は 1 年後だね。'生殖医療 (シリーズ生命倫理学)'  
[https://www.amazon.co.jp/dp/4621084836/ref=cm\\_sw\\_r\\_tw\\_asp\\_f9taE.102SXQM](https://www.amazon.co.jp/dp/4621084836/ref=cm_sw_r_tw_asp_f9taE.102SXQM)

=== その他の図 ===

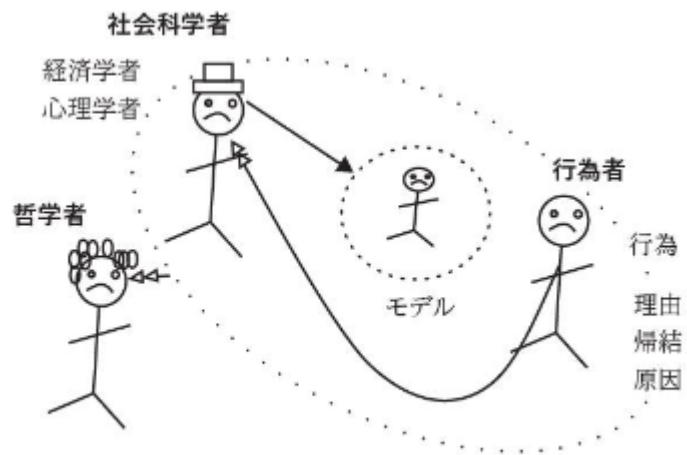


図0.1 哲学者たちと社会学者たち

<https://www.keisoshobo.co.jp/book/b615822.html>

ともかく、考えてみれば、宋銭は、もともと宋政府の方でも持ち出しを禁止し、さらに日本の政府も使用を禁止したというのに、当時の日本の「人々」は勝手に宋銭を使用してしまい、おまけに中国とは異なる独特な使い方をしていたのだから、貨幣流通というのも、随分いいかげんなものである。

ただ、いったんそうした宋銭の流通が始まってしまうと、日本では、誰もが宋銭を使用し、その独特な慣行に従っていくしかなくなる。こうして、鎌倉時代と室町時代を通じて宋銭は流通し続けたのであるが、この間、日本の自国銅銭は流通していない。もつとも、私鑄銭としては、銅銭は盛んに鑄造されているけれども、それらの刻印はしばしば宋銭など中国の銅銭を模したものであったから、そうした私鑄銭は、所詮、宋銭への高い信任を前提として流通したにすぎない。宋銭を駆逐して日本の銅銭を流通させることなど、経済的には辺境地域に位置している鎌倉幕府や、限られた地域しか支配していない室町幕府・守護大名・戦国大名には、不可能だったのである。それは当然であって、もし彼らが自分の支配する地域で宋銭使用を本気で禁止しようものなら、商人がその地域を敬遠し、そこには物資が入ってこなくなってしまう恐れがあったからである。

